第２回 みやぎ観光振興会議 大崎圏域 宿泊事業者部会
【日時】 令和８年１０月５日（月） 午後１時３０分 ～午後３時
【場所】 大崎市鳴子公民館ホール

【委員からの主な意見】

（１）宿泊税を活用した今後の観光振興施策について

（委員１）

○ 旅館業をしていると、自分たちのおもてなしに自信はあるが、お客様に周遊していただくようなノウハウについては意外とわからないものだと感じる。

○ 観光地域づくりにおいては、旅館業と異業種の方を繋いだり、普段眠っている地域の資源の磨き上げなどを旅館業と繋いだりといったことを自治体でもっと推進していけるとよいと感じた。

（委員２）

○ 資料１の６ページにある「中長期的な旅行消費額向上に向けた布石」として「高付加価値化」や「ブランド化」を挙げているが、具体的にどのような内容なのか。

【事務局回答】

1 回に 100 万円以上消費するインバウンドの富裕層の誘客を目指している。欧米豪、特にフランスからの誘客を目指してパリに職員を 1 人派遣しているところである。将来を見据えて、例えば 1 回で数十万ほどの料金が発生するような高付加価値のコンテンツの獲得を目指す。

（委員３）

○ 資料１の２ページにある観光客数の推移について、仙台圏域が伸びている要因はあるか。

（事務局の回答を受けて）

仙台は都市型のイベント開催が増え、また、宿泊施設の増加により周辺観光の拠点となっている。宮城県の各地域への周遊の促進ということで、人が集まって過ごせるようなゲートウェイ的な案内所を、仙台空港、仙台駅、あるいは古川駅のような圏域の主要駅に設けてほしい。若い人たちも宮城県のいいところを掴めるような集い場にまで発展すればよいと思う。

○ 資料１の６ページに課題として位置づけられている「県内居住者の減少・流出への対策」については、県内居住者が県内の宿泊・観光施設を利用するよう、みやぎポイントやスタンプラリーなどのインセンティブが欲しい。

（委員４）

○ 地方は仙台圏より繁忙期と閑散期の差がある。宿泊割は、リピーター対策としては課題もあるが、閑散期に売上が上がるため助かっている。

（委員５）
○ 海外から来る方は円安も相まって「日本のものが安い」と言うが、ほとんどの日本人は出さない高額な宿泊料を設定しても海外の方で予約が埋まるようなアンバランスな環境ができつつあるのは恐ろしいと感じる。
○ 宮城県の入込客集が1,000万人を超えたというところではあるが、県内の宿泊のキャパシティもどんどん増えているところである。我々旅館業は「儲かっていいね」と思われがちだが、現状は実感が伴っていない。

（委員６）
○ 陸羽東線の古川・鳴子間の平均通過人員がコロナ禍前と比較して大幅に減っており、非常に心配している。温泉街をブラッシュアップし、広報を強化し、陸羽東線を観光路線にしたい。宿泊税を活用した誘客宣伝に期待している。

（委員７）
○ 関東圏と比較してインバウンドが少なく、ゆっくりできるから宮城県に来ているというお客様も多い。インバウンドの呼び込みも一つの策だが、県内や東北各県の方の流動も基本中の基本として大切にしていかなければならない。
○ 補助金の募集期間や締め切り期間をより明確に出してほしい。
○ 岩手や秋田が宿泊割を実施した初夏にお客様があまり入らなかった。宿泊割をやるのであれば、東北各県と合わせるように検討していくのがいい。

（委員８）
○ 岩手や秋田がキャンペーンをやっているのに宮城がやっていない状況では、お客様を取られてしまう。宿泊税以外の財源でも対策ができるはずだ。
○ 閑散期がいつかはエリアごとに違う。それも分かった上で施策をしてほしい。

（２）大崎圏域における宿泊税活用事業の進捗状況について

（委員３）
○ 案内所の関係で、資料２の１ページの「古川駅ハブ戦略」について、もうすでに仕上がっている状態なのか確認したい。
【事務局回答】
案内所の機能については今後検討を進める段階である。

（３）その他

（委員５）
○ ドライブ割のチラシについて、予算がなくなり次第終了なのか、期間内は必ずやるのか確認

したい。

【事務局回答】

予算額3,000万円に達し次第、終了となる。

（委員８）

○ ドライブ＆ステイ割のちらし等が宿に１枚だけ配布されても、お客様に渡せない。お客様に渡せる形のものを用意してほしい。

（委員１）

○ 商品の自走のためには、知らせなければ始まらない。我々個人事業者では発信できないところのお手伝いを、ぜひ観点に入れてほしい。